

ヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラと 世親の『唯識二十論』『俱舎論』(上)

森山清徹

〔抄録〕

ニヤーヤ学派のヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラは、ニヤーヤーストラ、NS 4-2-23から4-2-34に至る注釈において、世親の『俱舎論』(AKBh.)の全体 (ava-yavin) 批判、原子積集説及び『唯識二十論』(Vś)における全体、原子論批判を取り上げ論難することを通じ自学派の哲学の正当性、原子無部分論を提示している。論難の対象とされるものは、特にVśからはその自注も含め十二偈に及ぶ。そこには、世親の全体批判、原子の有部分を論拠とすること、唯識派の空の解釈と表象のみ (vijñaptimātra) の理論、夢の中での認識の問題及び行為とその結果(業果)の問題が取り上げられている。これらは、部分とは別な全体 (avayavin) を立て、全体すなわちドラヴィヤを始めとする六つの言葉の対象 (padārtha) の実在を主張するニヤーヤ学説とは、悉く異なり対照的である。換言すれば、世親の学説を論破し原子無部分論を確定しないことには、ニヤーヤ学説の正当性は樹立し得ないことになるのである。また、世親のVśが、その後、ヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラによりニヤーヤ学説の正当性を主張する上で、どう扱われているかを知ることは唯識思想史上からも看過し得ない。

キーワード 世親、『唯識二十論』、原子論、ヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラ

ニヤーヤ学派と『唯識二十論』(Vś)

ニヤーヤ学派のヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラとが、世親のVśに表される唯識無境(表象のみ)の立論、それは全体 (avayavin)、原子 (paramāṇu) 批判を通じ樹立される、に反論するものは、以下の世親説に対してである⁽¹⁾。それは、

(1) 全体批判

(1-1) 部分 (avayava) と別な単一な全体 (avayavin) は存在しない (Vś k.11)⁽²⁾

(1-2) ニヤーヤ学派が立てる運動 (karman, kriyā) のうち行くこと (gamana) に関して、

行った所と行っていない所という対立したことがあり得る故、単一な全体は存在しない、さもなければ一步で全てを行くことになる (Vś k.15)

(2) 原子批判

一、多及び部分 (avayava) という点からの原子 (paramāṇu) 批判 (Vś kk.11, 12, 14)

(3) 相対的な空の問題

人無我、法無我は、一切に関しての空ではなく所取、能取に関しての空である故、表象のみ (vijñaptimātra) が空ではなくとも、矛盾はない (Vś k.10)

(4) 夢の中での認識の問題及び行為とその結果の問題

表象のみであっても、夢の中での如く空間的、時間的限定があること及び行為とその結果があること (Vś kk.1, 2, 3, 7, 16, 17, 18)

本稿では(1)―(3)を扱いその該当する NBh. NV の訳出と共に表す。紙数の関係で(4)は別稿にて発表する。なお、(1)の特に(1-2)はダルマキールティによる全体批判にも影響を与えたと考えられる。(1)―(3)は、シャーンタラクシタ、カマラシーラ、ハリバドラらに後期中観派による離一多性を立証因とする無自性論証の樹立や唯識派の相対的な空性に対し絶対的な空性を立て論難するものに取り入れられている。

1. [1A] [1B] [1-1~3] の解説

NS 4-2-23と NS 4-2-24 とは共に、ニヤーヤ学派にとっての対論者の見解として原子は有部分であることが表され、それに対しニヤーヤ学派は原子の無部分を標榜する構図となっている。NS 4-2-25では、それらが順に扱われ、ニヤーヤ学派は、その注釈において NS 4-2-23と NS 4-2-24との対論者の見解を詳細に論難し原子の無部分であることを論じている。これらの内容を示すと、対論者の原子の有部分論を表す NS 4-2-23をヴァーツヤーヤナの注釈には、形 (saṁsthāna) は部分 (色彩の原子) の集結したもの (avayavasanniveśa) であることが表わされている。これは世親が、(1)AKBh [1-1~2] で経量部説として形は実体として存在するものではなく、長いなどの形は原子の状態で存在するのではなく、多く [の部分である色彩の原子] が集結した (saṁniviṣṭa) 場合に、同様に長いなどの [形] の仮の設定がある、と表明する内容を指示していると思われる。これは、形の原子は認められないが、色彩の原子を認め、その集結したものが形であるから、色彩の原子が集結し得る限り、世親にとってそれは有部分を意味すると理解できよう。したがって、ヴァーツヤーヤナは NS 4-2-23を解説するに際し [1A]、AKBhにおける世親の経量部説 [1-1~2] を取り上げていると考えるのである。

[1A] NBh pp. 1064, 2-4 ad NS 4-2-23

mūrttmatām ca saṁsthānopapatter avayavasadbhāvaḥ // 23 //

paricchinnānām hi sparśavatām saṁsthānaṁ trikoṇaṁ caturasraṁ samaṁ parimaṇḍalam ity upapadyate, yat tatsaṁsthānaṁ so 'vayavasanniveśaḥ, parimaṇḍalāś cānavas tasmāt sāvayavā iti // 23 //

[反論者の主張] また [諸原子は] 部分を有する。諸の物体 (mūrttimat) には形 (saṁsthāna) が具わっているから (NS 4-2-23)。

なぜなら、諸の限定された触れられるもの (物質) の形 (saṁsthāna) は三角であり、四角であり、等しく [あるのが] 球形 (parimaṇḍala) であるということになる。その形というものは部分 (色彩の原子) の集結したもの (avayavasanniveśa) である⁽³⁾。また、諸原子は球形 (parimaṇḍala)⁽⁴⁾である。したがって諸の部分 (色彩の原子) を有するもの (sāvayava) である。

[1B] NV p. 1064, 13-15 ad NS 4-2-23

mūrttimatāṃ ca saṁsthānopapatter avayavasadbhāvaḥ // 23 //

sāvayavāḥ paramāṇavo mūrttimattvād (cf NV p.1067, 16 ad NS 4-2-25) iti saṁsthānavattvāc ca sāvayavā iti / saṁsthānavat sāvayavaṁ dr̥ṣṭaṁ ghaṭādi, saṁsthānavantaś ca paramāṇavaḥ, tasmāt sāvayavā iti (NBh. p.1064, 4) // 23 //

[反論者の主張]⁽⁵⁾ また [諸原子は] 部分を有する。諸の物体 (mūrttimat) には形 (saṁsthāna) が具わっているから (NS 4-2-23)。

(宗) 諸原子 (paramāṇu) は部分を有する (sāvayava)。

(因) 物体としての性質 (mūrttimattva) があるから⁽⁶⁾。

というのは、また [諸の物体は] 形を有する性質があることから、諸の部分有するということである。形を有する壺などが部分を有するものであることが見られる。また、諸原子は形を有するものである⁽⁷⁾。したがって諸の部分有するものである。

[1-1] AKBh. p. 194, 13-18

nāsti saṁsthānaṁ dravyata iti sautrāntikāḥ / ekadīnmukhe hi bhūyasi varṇa utpanne dīrghaṁ rūpaṁ iti prajñāpyate / tam evāpekṣyālpīyasi hrasvam iti / caturdiśaṁ bhūyasi caturasram iti / sarvatra same vṛttam iti / evaṁ sarvaṁ / tadyathā 'lātam ekasyāṃ diśi deśāntareṣv anantareṣu nirantaram āśu dr̥ṣyamānaṁ dīrgham iti pratīyate sarvato dr̥ṣyamānaṁ maṇḍalam iti / na tu khalu jātyantaram asti saṁsthānam /---

tasmān nāsti dravyataḥ saṁsthānam /

実体という点からは、形 (saṁsthāna) は存在しないと経量部は [主張する]。なぜなら、一つの方面をもったより多くの色彩 (varṇa) が生起している場合、長い色彩 (rūpa) であると仮に設定される。その同じ [一つの方面] に依存して、より小さい [色彩が生起している場合] 短い [色彩である] と [仮に設定される]。四方としてより多く [の色彩が生起している場合] 四角であると [仮に設定される]。全ての [面] に等しく [色彩が生起している場合] 球形 (vṛtta) であると [仮に設定される]。同様に、全ての [形] が [仮に設定されて] 存在する。例えば、松明 (alāta) が一方向において、間隔のない諸の別の場所で連続的に速やかに見られているものが長いということであると認識される。全ての点から見られているものが球形、円

(maṇḍala) であると [認識される]。他方、別の種類の (実体としての) 形は存在しない。---
したがって、実体という点から形は存在するのではない。

[1-2] AKBh. p. 195, 5-10

yac cāpi kiñcit sapratighaṃ rūpam asti tad avaśyaṃ paramāṇau vidyate /
na cāṇau tat / (k.3b1)

na ca saṃsthānaṃ paramāṇau vidyate dīrghādi / tasmād bahuṣv eva tathā saṃniviṣṭeṣu
dīrghādiprajñaptiḥ / atha mataṃ saṃsthānaparamāṇava eva tathā saṃniviṣṭā dīrghādisa-
m̐jñāṃ labhanta iti / so 'yaṃ kevalaḥ pakṣapātas teṣāṃ asiddhatvāt / siddhasvalakṣa-
ṇānāṃ hi teṣāṃ saṃcayo yujyate / na ca saṃsthānāvayavānāṃ varṇādivat svabhāvaḥ
siddha iti kuta eṣāṃ saṃcayaḥ /

また、何らかの抵抗性のある色形 (rūpa) であるものは、必ず原子 (paramāṇu) の状態で存在する。

それ (長いなどの形) は、原子の状態で存在するのではない (k. 3b1)。

また、長いなどの形 (saṃsthāna) は原子の状態で存在するのではない。したがって、多く [の色彩の原子] が集結した (saṃniviṣṭa) 場合に限って、同様に長いなどの [形] の仮の設定がある。もし、同様に、集結した諸の形の原子 (saṃsthānaparamāṇu) 自体が、長いなどの名称を得ると考えるなら、それは単にこの偏向した考えに立つこと (pakṣapāta) に過ぎない。それら (諸の形の原子) は成立しないからである。なぜなら、諸の自己の特徴が成立しているそれらのものには、集合 (saṃcaya) が合理的である。しかし、諸の形の部分 (saṃsthānāvayava) には色彩 (varṇa) などのように [原子としての] 自性 (svabhāva) が成立していないから、どうしてこれら (諸の形) の集合が存在しようか [諸の色彩だけに集合が存在する]。

[1-3] AKBh p. 195, 10-15

yat tarhi varṇaś cābhinnō bhavati saṃsthānaṃ ca bhinnaṃ dṛśyate mṛdbhājanānām / nanu
coktaṃ yathā kṛtvā varṇe (saṃniviṣṭavarṇe) dīrghādisaṃjñā prajñapyate yathā ca pipili-
kādinām abhede pañkticakrādīnāṃ bhedaḥ prajñāyate tathā saṃsthānasyāpi / yat tarhi
tam api (tamasī) dūrād vā varṇam apaśyantaḥ sthāṇvādīnāṃ dairghyādīni paśyanti varṇam
eva te tatrāvyaktaṃ dṛṣṭvā dīrghādiparikalpaṃ kurvanti / pañktisenāparikalpavat /
itthaṃ caitad evam / yat kadācid anirdhāryamāṇaparicchedaṃ saṃghātāmā-tram avya-
ktaṃ dṛśyate kim apy etad iti /

そうであっても、また諸の土器 (mṛdbhājana) にとって色彩は区別されないが、しかし形 (saṃsthāna) は区別されることが見られるではないか。例えば、集結した色彩 (saṃniviṣṭavarṇa) に関して長いなどの名称が仮に設定されるように。また、例えば、蟻 (pipilika) などには区別はなくとも、[集合した場合] 行列 (pañkti) や輪などの区別が知られるように、

それと同様に「色彩の区別はなくとも」形の「区別が知られる」と述べられた。そうであれば、闇の中で、あるいは遠方から柱 (sthāṇu) などの色彩 (varṇa) を見ない人々が、長さ (dairghya) などを見る。その場合、彼等は不明瞭な色彩だけを見て長いなどという構想をする。「色彩の区別はなくとも」行列や軍隊を構想するように⁽⁸⁾。また、それはその通りである。ある時は確定した区別のない不明瞭な総体だけが見られる。このことが何か問題となろうか。

2. [2A, 1] ~ [3B, 10] の解説

一方、NS 4-2-24の注釈において [2A, 1] ヴァーツヤーヤナは、対論者の主張として原子の結合ということ、さらに具体的に「前後の二なる原子と結合している中央に存在している原子は前後の二原子を隔て、それぞれの部分 (bhāga) で結合する。全面的に結合する場合は、全面的に一つとなる」という主旨を表わしている。このことをウッディヨータカラは NS 4-2-25の注釈中 [3B, 7]、偈によって表したものが世親の Vś k.12であると言明している。したがって、ヴァーツヤーヤナは NS 4-2-23を解説するに際し、AKBh. に表される世親の経量部説を、また NS 4-2-24の注釈 [2A, 1] において同じく世親の Vś k.12をウッディヨータカラに先立ち取り上げ、それぞれ共通した方法で、すなわち原子よりもさらに小さなものは存在しないということにおいて原子の部分は否定されると論難し、また部位の区別であるから原子に単一性はないという Vś k.14abにも [3A] で形 (saṁsthāna) や結合 (saṁyoga) があるから [NS 4-2-23, 24] 諸原子には部分があるという論理は無限遡及 [NS 4-2-25] となるから、原子は無部分で単一であり得ると反駁し、原子の無部分説を主張する。

さらに、ウッディヨータカラは世親の原子有部分説は無限遡及になるという NS 4-2-25の注釈で [3B, 1]、(1)を「原子は物体 (mūrttimat) であるから部分を有する」を対論者による主張命題と見なし、ウッディヨータカラにとって原子は無部分であり物質であるから、因は不確定 (anekānta) であることを指摘する。また「有部分な原子は単一の原子を前提とするから作られたもの (kṛtaka) である」という主張命題には喩例が存在せず、またニヤーヤ学派の無の分類の一つである結果が起こる以前の無 (prāgabhāva) も成立しない。世親にとって、色彩 (rūpa) などと別な原子は認められず、それらは同一であるから、別々でないもの間に色彩は原子からなるという所有関係は成立しない。(2)に関しては [3B, 6]、ヴァーツヤーヤナが指摘するのと同様、微細なものよりさらに小さな原子は存在しないことを述べ、またウッディヨータカラは世親の Vś k. 12を引用し、以下の批判を表明している。すなわち k. 12ab に対しては、原子に関して諸の位置 (deśa) は全く存在しないから原子は無部分である。したがって、世親の指摘する k. 12cd での同一の位置 (samānadeśa) にあることになるという矛盾も起こらないと反駁する。さらにウッディヨータカラは「部位の区別を根拠に原子の単一性はあり得ない」という Vś k. 14ab を引用し [3B, 10]、それに対しては、部位の区別 (digdeśabheda) は存在しないから原子の単一性は揺るがないと弁明する。

[2A, 1] NBh pp.1064, 5-8 ad NS4-2-24

saṃyogopapatteś ca // 24 //

madhye sann aṇuḥ pūrvāparābhyām⁽⁹⁾ aṇubhyām saṃyuktas tayor vyavadhānaṃ kurute /
vyavadhānenānumīyate pūrvabhāgena pūrveṇaṇunā saṃyujyate, parabhāgena pareṇaṇunā
saṃyujyate, yau tau pūrvāparau bhāgau tāv asyāvayavau, evaṃ sarvataḥ saṃyu-
jyamānasya sarvato bhāgā avayavā iti /

[対論者の主張] また [原子には] 結合 (saṃyoga) が具わっているから (NS 4-2 24)。
前後の二なる原子 (aṇu) と結合している中央に存在している原子は、その二 (前後の二なる
原子) を隔てよう。[中央に存在している原子は] 前 (東) の部分 (bhāga) で [後方の原子
と] 隔てられている前方の原子と結び付けられ、[中央に存在している原子は] 後ろの部分で
[前方の原子と隔てられている] 後方の原子と結び付けられると推定される。その (中央の原
子の) 前後の部分とは、これ (中央の原子) の二なる部位 (avayava) である [中央の原子は
単一ではない]。同様に [中央の原子が前後の原子と] 全体 (単一) 的に (sarvatas) 結合し
ているものには、全体 (単一) 的に諸部位としての諸部位がある (一つの原子と同じ大きさとな
り集合としての多ではない)⁽¹⁰⁾。

[2A, 2] NBh. pp.1064,9-1065,6 ad NS4-2-24

yat tāvan mūrtimatāṃ saṃsthānopapatter avayavasadbhāva (NS 4-2-23) iti atroktam /
kim uktam vibhāge 'lpataraprasaṅgasya yato nālpiyas tatra nivṛtter aṇvavayavasya
cāṇutaratvaprasaṅgād aṇukāryapraṭiśedha iti⁽¹¹⁾ / yat punar etat saṃyogopapatteś ceti
(NS 4-2-24) sparśavattvād vyavadhānaṃ āśrayasya cāvyaṅgā bhāgabhaktiḥ / uktam
cātra sparśavān aṇuḥ sparśavator aṇvoḥ pratighātād vyavadhāyako na sāvayavatvāt /
sparśavattvāc ca vyavadhāne saty aṇusaṃyogo nāśrayaṃ vyāpnotīti bhāgabhaktir bhavati
bhāgavān ivāyam iti / uktam cātra vibhāge 'lpataraprasaṅgasya yato nālpiyas tatrāvasth-
ānāt tadavayavasya cāṇutaratvaprasaṅgād aṇukāryapraṭiśedha iti⁽¹²⁾ // 24 //

[ヴァーツヤーヤナによる答論] まず、[原子は] 部分 (avayava) を有する。[原子は] 諸の
物体には形 (saṃsthāna) が具わっているから (NS 4-2-23)。このことに関しては答えられ
ている。

[反論] 何が答えられたのか。

[答論] より小さなもの (alpatara) となったものが分割 (vibhāga) される場合、それより
もさらに小さなもの (alpiyas) はないということにおいて、微細なもの (aṇu) の部分は否定
されるから、またより微細なものになってしまうから、微細なもの (aṇu) の結果であること
は否定されるからである⁽¹³⁾。

[反論] また結合 (saṃyoga) が具わっているから (NS 4-2-24) というこのことは、[原子
は] 触れ得るものである限り、妨げられること (vyavadhāna) を引き起こす。また [結合
は] 依存するもの (他の原子) の全てに行き渡らない故 (avyāṅgā) (妨げられて結合しない

部分も存在するから)、[原子は] 部分に分割されるもの (bhāgabhakti) である。

[答論] この場合、原子は触れ得るものであるが、妨げられるもの (vyavadhāyaka) である。触れ得る二原子には抵抗 (pratighāta) が存在するからであるが、部分性を有する (sāvayavatva) からではないと答えている。

[反論] また触れ得ることを具えている性質があるから、妨げられること (vyavadhāna) が存在する場合、原子の結合は依存するもの (他の原子) に全面に渡っているのではない (結合しない部分もある) から、[原子は] 部分に分割されるものであり、これ (原子) は部分を有するもの (bhāgavat) であるかのように存在する。

[答論] また、上で指摘された (uktaṁ cātra)。より小さなものとなったものが分割される場合、それよりもさらに小さなものは存在しないということにおいて、その (微細なもの) の部分となる (avasthāna) から、またより微細 (aṇu) なものになってしまうから、微細なものの結果であることは否定される⁽¹⁴⁾。

[3A] NBh. pp. 1065, 7-1071, 3 ad NS 4-2-25

mūrtimatāṃ ca saṁsthānopapatteḥ (NS 4-2-23) saṁyogopapatteḥ ca (NS 4-2-24)

paramāṇūnām sāvayavatvam iti hetvoḥ

anavasthākāritvād anavasthānupapatteḥ cāpratiṣedhaḥ (NS 4-2-25)

yāvan mūrttimad yāvac ca saṁyujyate tat sarvaṁ sāvayavam ity anavasthākāriṇāv imau hetū sā cānavasthā nopapadyate / satyām anavasthāyām satyau hetū syātām, tasmād apratiṣedho 'yaṁ niravayavatvasyeti / vibhāgasya ca vibhajyamānahānir nopapadyate tasmāt pralayāntatā nopapadyate iti / anavasthāyām ca pratyadhikaraṇaṁ dravyāvayavānām ānantiyāt parimaṇabhedānām gurutvasya cāgrahaṇaṁ samānaparimāṇatvaṁ cāvayavāvayavinoḥ paramāṇvavayavavibhāgād ūrdhvam iti // 25 //

[仏教徒の主張] また [原子は部分を有する。] 諸の物体 (mūrtimat) には形 (saṁsthāna) が具わっているから (NS 4-2-23)。

また結合 (saṁyoga) が具わっているから (NS 4-2-24)。

[ニヤヤ学派の主張] 諸原子には部分があるという二つの論理 (hetu) は、無限遡及となるから、また無限遡及は妥当しないから [原子は無部分であるということ] を否定することはできない (apratīṣedha) (NS 4-2-25)。

物体 (mūrtimat) である限り、また結びつけられる限り、そのすべてのものは、部分を有するもの (sāvayava) であるという⁽¹⁵⁾この二つの論理は無無限遡及となり、また無限遡及は妥当しない。無限遡及が正しい場合、(物体であるから、結びつけられるからという) 二つの論理は正しいことになろう。したがって、これ (二つの論理) は無部分性 (niravayavatva) (単一性) を否定することはではない (apratīṣedha)。また、分割 (vibhāga) にとって、分けられているものの減損 (hāni) はあり得ない。したがって [原子にとって] 解体 (pralaya) の

究極（無）はあり得ない。また無限遡及である場合、諸のドラヴィヤの部分は無限となるから、また諸の分量の区別には重さを把握することがない。また原子を部分に分割（paramāṇv-avayavavibhāga）した後では部分（avayava）と全体（avayavin）との両者は同じ分量のもの（無）となる⁽¹⁶⁾。

[3B] NV p.1065,13-18 ad NS 4-2-24

saṃyogopapatteś ca (NS 4-2-24) / anavasthākāritvād anavasthānupapatteś cāpratiśedhaḥ (NS 4-2-25) / sāvayavatvaṃ saṃyogitvād iti sūtrārthaḥ / nanv idaṃ sūtraṃ saṃsthānavattvād ity anenaiva caritārthaṃ saṃyogaviśeṣasya saṃsthānaśabdenābhidhānāt na caritārthaṃ, avayavasamāyogaviśeṣasya saṃsthānatvenābhidhānāt saṃyogamātraṃ ca saṃyogaśabdenābhidhīyata iti na doṣaḥ / tatra mūrtir nāmāvyāpino dravyasya ṣaḍvidhaṃ parimāṇam aṇu mahad dīrghaṃ hrasvaṃ paramahrasvaṃ paramāṇv iti / saṃsthānaṃ nāma pracayākhyāḥ saṃyogaḥ / saṃyogo 'prāptipūrvikā prāptir iti /

[仏教徒の主張] また結合（saṃyoga）が具わっているから（NS 4-2-24）

[ニヤーヤ学派の主張] 無限遡及となるから、また無限遡及は妥当しないから [原子は無部分であるということ] を否定することはできない（apratīśedha）（NS 4-2-25）。

（宗）[原子は] 部分という性質を有したものである。（因）結合するという性質があるから⁽¹⁷⁾。というのがスートラ（cf NS 4-2-24）の意味である。[先のNS 4-2-23では] 形を有する性質がある（saṃsthānavattva）からというのは、実際には [形に限定された] 特殊な結合（saṃyogaviśeṣa） だけが、この形という言葉（saṃsthānaśabda）によっていわれているから。[形に限定された特殊な結合を] このスートラ（NS 4-2-24）は、実際にはいっていない。[NS 4-2-23では] 部分の特殊な結合（avayavasamāyogaviśeṣa）が、形という性質（saṃsthānatva）によっていわれているから、しかし [NS 4-2-24では] 結合という言葉によって単なる結合（saṃyogamātra）がいわれているから、誤りはない。

その場合、(1) 物質（mūrti）というものは限定されたドラヴィヤに存在し、六種の側面（parimāṇa）がある。[すなわち] 小さい（aṇu）、大きい（mahat）、長い（dīrgha）、短い（hrasva）、最も短い（paramahrasva）、最も小さい（paramāṇu）というものである。(2) 形（saṃsthāna） というのは集合（pracaya）と呼ばれる結合（saṃyoga）である。(3) 結合（saṃyoga）とはまだ出会っていないものが出会うことである。

[3B, 1] NV pp. 1065, 18-1066, 7 ad NS 4-2-25⁽¹⁸⁾

yat tāvat mūrtimattvāt sāvayavā iti⁽¹⁹⁾ tan na , anekāntāt yaḥ paramāṇor avayavaḥ sa mūrtimāṃś ca niravayavaś cety anekāntaḥ / atha mūrtimattvāt tasyāpy avayavāḥ santi evaṃ sati truṭir ameyaḥ prāpnoti, gurutvasamākhya-parimāṇair ity uktam / atha tāvan mūrtimad vibhajyate yāvad anta iti anto niravayava iti vācyam / athānto vibhāgaḥ sa na yuktaḥ, vibhāgasya vibhajyamānair vinā 'nupapatter iti /

[ニヤーヤ学派の主張] まず、[諸原子は] 部分を有する。[諸原子は] 物体としての性質 (mūrtimattva) があるから、ということは [正しく] ない。不確定 (anekānta) であるから。原子の部分というものは、物体であり、部分をもたないもの (niravayava) である。したがって [部分をもたない物体が存在するから、因は] 不確定である。もし、それにも物体という性質 (mūrtimattva) があるから、諸部分が存在するなら、そうであれば、微細なもの (truṭi) は [部分をもたないから] 量り得ないものとなる。重さ、数、広がり (parimāṇa) としても [量り得ない] と (NS 4-2-17で)⁽²⁰⁾ いわれた。もし、まず物体が分割される限り、極限に至るまで [分割される] から、極限は無部分 (niravayava) であると言われなくてはならない。あるいは、極限が分割 (vibhāga) されるということは不合理である。分割されることなしに分割はあり得ないからである。

[3B, 2] NV p. 1067, 2-8 ad NS 4-2-25

etāvac caitat syāt paramāṇvanto vibhāgaḥ pralayānto vā ananto vā yadi paramāṇvanto 'nekāntaḥ / vyāhataṁ bhavati paramāṇur mūrtimāṁś ca na ca sāvayava iti / kaḥ punar atra vyāghātaḥ niravayavaṁ mūrtimantaṁ ca paramāṇuṁ pratipadyase, sāvayava iti ca bravīṣi / pratipattya vyāhanyate / anante pralayānte ca vyāghātaḥ truṭer ameyatvaprasaṅgaḥ, vibhāgasya cānādhāratvaprasaṅgaḥ / sāvayavaḥ paramāṇur iti ca pratijñāpade vyāhate / katham iti sāvayavaśabdasyārthaḥ samānajātīyārabdhaṁ samānajātīyāśritam avayavaḥ tadādhāra iti / sāvayavaḥ paramāṇur iti bruvatā kāryaviśeṣaḥ paramāṇur ity uktam bhavati / kāryaviśeṣaḥ paramāṇuś ceti vyāhatam /

またその限り、以下のようになろう。分割 (vibhāga) は、(1)原子を極み (anta) とするのであるのか、あるいは(2)解体を極みとすること (pralayānta) であるのか、あるいは(3)果てがないこと (ananta) であるのか。もし、(1) [分割は] 原子を極みとするなら、[部分をもたないから] 不確定 (anekānta) となる。原子は物体 (mūrtimat) であり、しかし [原子は極限であるから] 部分を具えたもの (sāvayava) ではないということは矛盾である [結合をみとめているから、原子は部分を有するというから]。

[反論] さらにこの場合、何が矛盾であるのか。

[答論] (原子が極みであると主張する場合) 原子を部分をもたないもの (niravayava) であり、物体 (mūrtimat) であると汝は認める。それにもかかわらず、[物体であるから] 部分を有する (sāvayava) と汝は主張する。[その主張は先に原子を無部分と] 述べたこと (pratipatti) と矛盾する。(3) 果てがないことに関して、及び(2) 解体を極みとすることに関して矛盾がある。微細なもの (truṭi) は量り得ないものである。また (vibhāga) 分割には基体としての性質がないこと (anādhāratva) になる。原子は部分を有するものである⁽²¹⁾とは主張における二つの言葉が矛盾している。どうしてであるのか。部分をも有するという言葉の意味は同類のもの (samānajātīya) によって設けられた同類のものによって依存されるものを、

それを基体とする部分のことである。原子は部分を有するものであると述べることによって原子は特殊な結果 (kāryaviśeṣa) であると言われたことになる。特殊な結果であることと原子であることは矛盾する (原子は究極的な原因であって結果ではない)。

[3B, 3] NV p.1067, 8-13 *ad* NS 4-2-25

athaikaparamāṇur pūrvakatvaṁ paramāṇoḥ pratipadyase, tathā ca na paramāṇuḥ sāvayava iti nāsyāvayavāḥ santi, kiṁ tu kṛtakaḥ paramāṇupūrvakatvāt / etac ca na, dṛṣṭāntābhāvāt ekaṁ kāraṇam iti na dṛṣṭānto 'sti, ekena cārabhyamāṇasya paramāṇor na kāraṇasāmagryapekṣaṇam astīti na prāgabhāvo yuktaḥ / yasya prāgabhāvo nāsti tasya cotpādo 'pi na yuktaḥ / athaikaśabdapūrvakatve sati śabdādīnāṃ prāgabhāvādi pratipadyate tad apy asiddham naikaṁ kāraṇam asti āśrayādyapekṣaḥ śabdaḥ śabdāntaram karotīti /

また原子には前提として単一な (無部分な) 原子 (原因) が存在すると汝によって承認されている。また同様に原子は部分をもつものではないから、これ (原子) には諸部分が存在しないということである。そうではなくて、

(宗) [原子は] 作られたものである。

(因) 原子を前提としているから。

しかし、これは妥当しない。喩例は存在しない (作られたものは原子以外に存在しない) から、単一な原因が存在するという喩例は存在しない。また単一なものによって設けられている原子には原因の総体に依存することは存在しないから、[原子を前提とするなら結果が起こる] 前の非存在 (prāgabhāva) は不合理である [原因の時点で結果が存在することになる]。[結果が起こる] 前の非存在が存在しないもの (原因の時点で結果が存在するもの) には、また生起することも不合理である (すでに結果が存在するから)。もし音などにとって単一な音 (ekaśabda) を前提とすること (原因) が存在する場合 (結果はすでに存在することになるから)、諸の音にとって [結果が起こる] 前の非存在 (prāgabhāva) が認められる、ということも成立しない。[音には] 単一な原因は存在しない。基体などに依存している音が別の音を設ける。

[3B, 4] NV pp. 1067, 14-1068, 5 *ad* NV 4-2-25

pratipadyāpi caikaparamāṇupūrvakatvaṁ paramāṇoḥ kaḥ sāvayavārthaḥ katamas tatr-nāvayavaḥ katamas tatr-nāvayavīti atha kāraṇam evāvayava iti na kāryaparamāṇukāle kāraṇaparamāṇur astīti sāvayavārtho vaktavyaḥ / mūrtimattvāt sāvayavaḥ paramāṇur⁽²²⁾ iti bruvāṇo vikalpataḥ punaḥ paryanuyojaḥ keyaṁ mūrtih yayā mūrtyā mūrtimān paramāṇur iti / satyāṃ ca mūrtau kim (1) arthāntaram (2) anarthāntaram vā paramāṇor mūrtir iti (1) yadi rūpādīviśeṣo mūrtir na bhavatpakṣe tayā mūrtyā mūrtimān kaścana / na ca rūpādīvyatiriktaṁ pramāṇena paramāṇuṁ pratipadyase, sarvāpakarṣaprāptā rūpādaya eva paramāṇuḥ, na ca rūpādībhī rūpādayo rūpādīmanāḥ, (2) na cānarthāntarabhāve

matubvyutpādanam paśyāmaḥ /

原子には単一な原子（原因）を前提にすると認めても、[原子が] 部分を具えている（sāvayava）という意味は何であるのか。そこにおいて、どれが部分（avayava）であるのか。そこにおいて、どれが全体（avayavin）であるのか。もし原因こそが部分であるということなら、結果としての原子が存在するとき、原因としての原子（部分）は存在しない[刹那滅である]から、部分を具えていること（sāvayava）の意味を説明しなくてはならない。物体としての性質（mūrtimattva）があるから、原子は部分を具えていると主張する者⁽²³⁾は、さらに選択肢の点から問われなくてはならない。この[部分を有する]物質（mūrti）とは何であるのか。ある物質という点で原子は物体（mūrtimat）であるのか。また物質が存在する場合、(1) 物質は原子と別なものであるのか、(2) 別なものでないのか、(1) もし、物質が色形（rūpa）などの特殊性をもつなら、汝の学説（bhavatpakṣa）[経量部説]においては、その[色形と別な]物質（mūrti）という点で物体（mūrtimat）は何ら存在しない[色形の塊に他ならない、唯識はいかなる意味でも物体を認めない]。また、プラマーナによって色形（rūpa）などと別な原子を汝（世親）は承認しない⁽²⁴⁾。原子はすべてを減損した（apakarṣa-prāpta）色形（rūpa）などに他ならない。また色形などによって色形などが色形などを具えるものなのではない（同語反復となるから、色などとは別な基体が存在しなくてはならない）。(2) また（物質は原子と）別なものでない（[部分を有する]物質が原子と同じである）なら、我々は所有の接尾辞（matup）⁽²⁵⁾から派生することを見ない[所有の接尾辞は別々のものにおいてあるから、したがって物質は原子からなるものとはいえない]。

[3B, 5] NV p. 1068, 5-11 ad NV 4-2-25

nanu dṛṣṭo 'narthāntarabhāve 'pi matuppratyayo yathā hastimatī seneti na dṛṣṭa iti brūmaḥ / yathā ca senā arthāntaram tathoktam iti / asati cārthāntarabhūte paramāṇāv asatyāṃ ca mūrtau sāvayavāḥ paramāṇavo mūrtimattvād iti vākyaśārtho rūpādayo rūpādīmanto rūpādīmattvād iti / etena paṭo mūrtimattvāt sāvayava iti pratyuktam / na ca rūpādivyatiriktaṃ paṭam pratipadyase, na mūrtimattvam, atha ca mūrtimattvāt sāvayavaḥ paṭa iti ca bravīṣi / vyatirekābhyupagame vyāghātaḥ, anabhyupagame nārthaḥ si dhyatīti dṛṣṭāntasyobhayadharmasiddhatvāt na paṭe sāvayavatvaṃ mūrtimattvārtha iti / [仏教徒の主張] 別なものが存在しないとしても(区別されなくとも)、所有の接尾辞（matuppratyaya）が見られるではないか。例えば、象を具えた（hastimati）軍隊のように⁽²⁶⁾。

[ニヤヤ学派の主張] 以上の（別なものでなくとも所有を意味する接尾辞が用いられる）ことは見られるものではないと我々は述べる。また、例えば軍隊は[構成要素である象とは]別なものであるとそれと同様に答えられている⁽²⁷⁾。また、[物質と] 別なものとしての原子が存在しない（それらが同一である）場合、また[原子としての]物質（mūrti）が存在しない場合、

（宗）諸原子は部分を具えている（sāvayava）。

（因）[諸原子は] 物体としての性質（mūrtimattva）があるから。

という推論の意味は

（宗）色形（rūpa）などは色形などを有している。

（因）[色形などは] 色形などを具えている性質があるから。

ということ（同語反復）になる。このことによって、

（宗）布（全体）は部分を有している。

（因）[布は] 物体としての性質があるから。

と答えられる。また、色形（rūpa）などと別な布（全体）を汝（世親）は認め（pratipadyase）ない（汝にとって色形こそが布である）⁽²⁸⁾。[布とは別に] 物体としての性質を[認め]ない（それらが別々でなければ所属関係は成立しない）。それにもかかわらず、

（宗）布は部分を有する。

（因）[布は] 物体としての性質があるから。

と主張する。

[布は部分と] 別であると承認するなら、[汝にとって] 矛盾が存在する。[別であると] 承認しないなら、目指す事柄は証明されない（同じなら、所有関係が成立せず、布は部分をもたない）から喩例は両方（部分をもたないことと物質であること）の性質が成立するから、布（全体）に関して部分としての性質があること（sāvayavatva）は物体としての性質がある（mūrttimattva）という意味ではない（それらは別々である）⁽²⁹⁾。

[3B, 6] NV p. 1068, 11-17 ad NS4-2-25⁽³⁰⁾

etena sāvayavāḥ paramāṇavaḥ saṁyogopapatter (NV 4-2-24) iti vyākhyātam / saṁyogasyābhyugame vyāghātaḥ anabhyupagame paramāṇutvād iti hetvarthaḥ / saṁsthānaviśeṣavattvaṁ tu asiddham ya evārthaḥ sāvayavatvād iti, sa evārthaḥ saṁsthānaviśeṣavattvād iti / atha saṁsthānam asarvagatadravyaparimāṇaṁ pratipadyethāḥ, evaṁ sati mūrtisattvena saṁsthānavattvaṁ caritārtham iti pṛthag na vaktavyam mūrttimattvāt saṁsthānaviśeṣavattāc ceti / uktāṁ cātra vibhāge 'lpataraprasaṅgasya yato nālpiyas tatrāvasthānāt aṇvavayavasya cāṇutaratvaprasaṅgād aṇukāryapratīṣedha iti⁽³¹⁾ /

[仏教徒の主張] このこと故に、

（宗）諸原子は部分を有するものである。

（因）[諸原子は] 結合（saṁyoga）が具わっているから（NV 4-2-24）⁽³²⁾。

という。

[ウッディヨータカラによる弁明] [諸原子に] 結合が承認されるなら、[諸原子と結合とは別であるから] 矛盾が存在する。[諸原子に結合が] 承認されないなら（諸原子と結合とは同じということになるから）、原子としての性質であるからということが因（hetu）の内容となる。

他方、[原子が] 特殊な形 (saṁsthāna) を具えていることは成立しない (それらは同じであるから)。部分を具えている性質があるから、という意味が特殊な形を具えている性質があるから、という意味に他ならない。もし、形 (saṁsthāna) ということが全てに行き渡ったドラヴィヤとしての領域 (parimāṇa) をもたないものである (形をもたないものもある、虚空、時間、方角、マナスであろうか) と汝が理解するなら、そうであれば、物質としての存在 (mūrtisattva) という点で形を有する性質があることが実際の意味となるから (両者は同じことになるから)、別々に物体としての性質がある (mūrttimattva) から、また特殊な形 (saṁsthāna) を具えているから⁽³³⁾ というべきではない [同じ内容をくり返していることになるから無意味である]。また、上で指摘された (uktaṁ cātra)。より小さなものとなったものが分割される場合、それよりもさらに小さなものは存在しないということにおいて、微細なものの部分は留まる (avasthāna) から、またより微細 (aṇu) なものになってしまうから、微細なものの結果であることは否定される⁽³⁴⁾。

[3B, 7] NV pp. 1068,18-1069, 2 ad NS4-2-25

yat punar etat saṁyogopapatter (NS 4-2-24) madhye sann aṇuḥ
pūrvāparābhyāṁ (NBh. p.1064,6 ad NS 4-2-24) sambadhyamānaḥ sāvayavaḥ / ayam eva
cārthaḥ karikayā giyate

ṣaṭkena yugapad yogāt paramaṇoḥ ṣaḍamśatā /

ṣaṇṇām samānadeśatvāt piṇḍaḥ syād aṇumātrakaḥ // (Vś k. 12)

paramāṇuḥ ṣaḍbhiḥ sambadhyamānaḥ ṣaḍamśaḥ prāpnoti, bhinnadeśatvāt sambandhā-
nām / atha samānadeśāḥ sarve saṁyogāḥ ṣaṇṇām paramāṇūnām piṇḍaḥ paramāṇumāra-
kaḥ prāpnoti /

[反論] また、このことは、結合することが具わっているから (NS 4-2-24)、前後の [原子] と結合している中央にある原子は⁽³⁵⁾ 部分を有する。まさしくこの意味が偈によって唱えられている。

同時に六個と結びつくから原子には六つの部分があることになろう。六個が同一の位置にある (samānadeśatva) から丸い固まりも一原子の分量となろう (Vś k. 12)⁽³⁶⁾。

六つと結合している原子は六つの部分があることになる。諸の結合には区別された位置 (bhinnadeśa) が存在するからである。もし、すべての結合が同一の位置 (samānadeśa) で起こるなら六つの原子は一原子のみの固まりとなる。

[3B, 8] NV p. 1069, 2-7 ad NS4-2-25

yadi dve dve dravye adhikṛtyābhidhiyate tato 'bhinnadeśāḥ / atha paramāṇūnām samban-
dhinaṁ paramāṇum adhikṛtyābhidhiyate tato 'nekaiḥ saṁyogaḥ samānadeśa iti na kiñcid
bādhyate / yat punar etat samānadeśāḥ paramāṇava iti, tatra, anabhyupagamāt / deśā eva
tāvāt paramāṇau na santīti kutaḥ samānadeśā bhaviṣyanti / na ca kiñcid dravyaṁ

samānadeśam astīty asiddho dṛṣṭāntaḥ /

[答論] それぞれ二つのドラヴィヤ [原子] に関して、[前後の原子と結合している中央にある原子が] いわれているなら、そのことから諸の区別された位置は存在しない (abhinnadeśa)。もし、諸原子の結合している原子に関して、[前後の原子と結合している中央にある原子が] いわれている場合、そのことから、多なる [原子] との結合 (saṃyoga) が同一の位置 (samānadeśa) で起こると決して論難されるものではない。また、諸原子が同一の位置にあることになるということは、その場合、認められないからである。まず原子に関して諸の位置 (deśa) は全く存在しないから、どうして同一の位置にあるということがあろうか。また同一の位置にあるいかなるドラヴィヤも存在しない。(一原子のみからなる丸い固まりという) 喩例は成立しない。

[3B, 9] NV pp. 1069, 7-1070, 3 ad NS4-2-25

nanu kāryakāraṇe saṃyogisamānadeśe yathā ghaṭaḥ paṭena sambadhyate tantunā tadarīśunā ca tantvāśrayeṇetyādī etad anabhyupagameṇa pratyuktam / samānadeśās tatra saṃyogā iti na kāryakāraṇe, na ca saṃyogā api dve dve adhikṛteti / ṣaṇṇām samānadeśatvād (Vś k.12c) iti vākyam na dravyasamānadeśatāyām vyavatiṣṭhate, na saṃyogasamānadeśatāyām iti /

[反論] 同一の位置で結合 (saṃyogin) している因果 (kāryakāraṇa) が存在する。例えば、壺が布と結び付けられるなら、また糸と糸の拠り所であるその一片 (amśu) とも [結び付けられる]。

[答論] これは認めれれないと答えられた。その場合、[諸原子が] 同一の位置での諸の結合というのは因果に関してではない。また、諸の結合もそれぞれの二に指定されるのではない。六個が同一の位置にあるから (Vś k.12c) という言明は、ドラヴィヤにとっての同一の位置にあることに関して確定しないし、結合にとっての同一の位置にあることに関して [確定し] ない。

[3B, 10] NV p. 1070, 4-8 ad NS4-2-25

yat punar etat

digbhāgabhedo yasyāsti tasyaikatvam na yujyate (Vś k.14ab) /

ka evam āha digdeśabhedo 'stīti, digdeśabhedāś ca diśaḥ saṃyogāḥ / parikalpitāmś ca digdeśabhedān kalpayitvā paramāṇor digdeśabhedo 'bhyupagamyate, mukhyatas tu na digdeśabhedo nāpi paramāṇor bhedaḥ, paramāṇur diśā sambadhyata iti etāvanmātraṃ vidyate, etac ca na kiñcid bādhathe /

またこのことは、

[世親による反論] 部位の区別 (digbhāgabhedo) の存在するものには単一性はあり得ない (Vś k. 14ab)。

[答論] だが、部位の区別 (digdeśabhedo) が存在するとそういうのであるか。また部位

の区別をもつた位置が結合をもつものである。また原子にとって構築された諸の部位の区別を想定して部位の区別が認められる。他方、実際には、部位の区別もなく、原子に区別もない。原子は位置と結び付けられるというその限りで存在する。また、このことは決して否定されない。

3. [3B, 11] の解説

以下ではヴァーツヤーヤナが直接言及しない内容に関してもウッディヨータカラは世親への批判を表わしている。すなわち Vś k. 14c <原子は有部分であるから、影と抵抗 (chāyāvṛti) とが起こる> に関し、それらは原子に部分性があるからではなく、物体であり触れ得る性質 (mūrtimatsparśavattva) があるからであり、影は光の原子 (tejaḥparamāṇu) が妨げられることによって起こる。したがって、k. 14c の主張命題は(1)の主張命題と同様、その因は対立、不成、不定などの誤謬となる。それ故、原子は無部分であると導く。以上の通り、世親による AKBh Vś における原子は有部分となるという論難を悉く退けようとしている。なお、Vś において、世親は原子は有部分であることを根拠に、原子の不成立を論じ、外界の対象を論破する唯識無境の確定を目指している。

[3B, 11] NV p. 1071, 5-13 ad NS4-2-25

chāyāvṛtī tarhi na prāpnuṭaḥ paramāṇor adeśatvād iti na deśavattvāc chāyāvṛti, kim tarhi mūrtimatsparśavattvāt mūrtimatsparśaviśiṣṭam dravyam dravyāntaram āvṛṇoti / kim idam āvṛṇoti svasambandhitvenāntarasya sambandham pratiśedhatīti / chāyā tu tejaḥparamāṇor āvaraṇāt, mūrtimatā paramāṇunā tejaḥparamāṇur āvriyate yatra cāsyāvaraṇam tatra chāyeti viralatejaḥsambandhīni dravyaguṇakarmāṇi chāyety abhidhīyate sarvato vyāvṛttatejaḥsambandhīni tu tāni tamaḥsaṃjñakānīti / tad evam chāyāvṛtyor anyathāsiddhitvād hetoḥ / etena kriyāvattvāt sparśavattvād dravyāntarārambhakatvāt kriyākāraṇasamskāraśrayatvāt paratvāparatvavattvād ity evamādi pratyuktam / katham iti yathā mūrtima-ttvāt sāvayavā ity⁽³⁷⁾ etasmin yākye (vākye) pratijñādoṣā hetudoṣaḥ, tathā sarveṣv eteṣu pakṣeṣu parapakṣābhyupagateṣu hetuṣu yathāsambhavaṃ viruddhāsiddhānīkāntikādidoṣabhedā vaktavyā iti / śeṣam bhāṣye /

原子には部分性はない (adeśatva) から影と抵抗 (chāyāvṛti) (Vś k. 14c) とは得られない⁽³⁸⁾ というのは、影と抵抗とは [原子に] 部分性がある (deśavattva) からではなく、かえって物体にして触れ得る性質 (mūrtimatsparśavattva) があるからである。物体であって触れ得る特殊なドラヴィヤが他のドラヴィヤを妨げるのである。これは何を妨げるのであるか。自己の結合したものが他のものとの結合を妨げる。他方、影は光の原子 (tejaḥparamāṇu) が妨げられることによって起こる。物体 (mūrtimat) である原子によって光の原子は妨げられる。またこれ (光りの原子) が妨げられるところに、影が存在するから、わずかな光と結合した諸のドラヴィヤ、グナ、運動 (karman) が影であるといわれる。他方、全面的に光りとの結合

が退けられたそれらのものが闇と呼ばれるものである。それは以上の通り影と抵抗とは別な仕方
 で存在する。（部分があるからという）立証因は成立しないからである。このこと故に、運
 動を有する性質（kriyāvattva）の故に、触れ得る性質の故に、別のドラヴィヤによって起
 された性質の故に、運動（kriyā）という原因としての活動に依存する性質の故に、こちらと
 あちらという性質を有する故に、というそういったことが答えられた。〔反論者による原子が
 無部分なら影と抵抗とは〕どうして⁽³⁹⁾〔起こるのか〕というの、例えば、〔諸原子は〕部分
 を有する（sāvayava）。〔諸原子は〕物体としての性質（mūrtimattva）があるから、という⁽⁴⁰⁾
 この言明に関しては、〔同語反復による〕立証因の誤謬を伴った主張命題の誤謬（pratijñā-
 doṣa）があるのと同様に、これら全ての主張に関して対論者の主張において承認されている
 諸の立証因には、それぞれに応じて対立（viruddha）、不成（asiddha）、不定（anaikānti-
 ka）などの種々の誤謬が指摘されなくてはならない。残りは明かとなろう。

4. [3B, 12] の解説

そこで争点となる運動を有する性質（kriyāvattva）に関し、ヴァーツヤーヤナは、全体が
 存在しないなら、すべての存在は把握されない（NS 2-1-34）について、すべての存在とは、
 運動（karman, kriyā）などドラヴィヤ、グナ、普遍、特殊、和合の六句義であると述べ、ま
 た諸原子は感覚によって捉えられない（atindriya）から、原子の状態にあるものは認識の対
 象ではない。すべての存在（六句義）が認識されるから、部分とは別なドラヴィヤである全体
 （avayavin）が存在すると我々は考える、と注釈している。したがって、運動などの六句義
 と全体とは必然的な関係にあることになる。この点、ウッディヨータカラも同様な注釈を施し
 ている。なお、運動には上昇（utkṣepaṇa）、下降（avakṣepaṇa）、収縮（ākuñcana）、伸長
 （prasāraṇa）、行くこと（gamana）の五種がある⁽⁴¹⁾。

以下の論議では、運動を有していることなどを根拠に諸原子の無常を論じる対論者に対し、
 運動を根拠とする限り、諸原子の無常は証明されるものではなく、全体を認める必要があり、
 全体が運動を有すること（kriyāvattva）は運動と和合すること（kriyāsamavāya）である
 というウッディヨータカラの見解が示される。すなわち運動を有することは顕現あるいは生起
 を意味するののかという選択肢を設け、何れの場合も原子にとって因は不成となること、また原
 子が運動を有するのであれば、両者は同一である故、別々なもの間に成立する所有関係
 （matup）もあり得ず、無常あるいは常住な原子以外の喩例が存在せず、原子（運動を有する
 もの）であるからという因は不共不定因となるという主旨の論駁を表わし、これは次の世親説
 を批判するものと考えられる。世親は Vś k. 15及びその自注で、単一な全体が存在するなら、
 順次に行くことはなく一步で全体を行ってしまうことになる故、全体には行くこと
 （gamana）という運動は存在し得ない。したがって、全体は成立しないと論じ、次に原子と
 いう点から区別を考慮すれば、原子は単一としても成立せず、色などの原子の集合として眼な
 どの感官の対象であることも成立しない。それ故、表象のみ（vijñaptimātra）であることを

論じている。この Vś k. 15の次第して全体 (avayavin) から原子へと吟味することは Vś k. 11と同様な方法であるが、行くこと (gamana)、すなわち運動という点から行っている部分とまだ行っていない部分との対立関係が存在しないことを根拠に単一な全体の不成立を論じる点で、これは、ダルマキールティの PVin におけるものに先行するものであり、ダルマキールティ、シャーンタラクシタらに影響したものといえよう⁽⁴²⁾。他方、『俱舎論』の場合と同様に諸部分と別な全体の不成立を述べる Vś k. 11とは、論難の視点が異なる。

[3B, 12] NV pp. 1071, 14-1072, 10 ad NV 4-2-25

ye tu kriyāvattvādibhiḥ paramāṇūnām anityatvaṁ sādhayanti taiḥ kriyāvattvaṁ vyañjakaṁ vā kārakaṁ vā 'vaśyam abhyupagantavyam / yadi kriyāvattvam anityatvasya kārakaṁ yad akriyaṁ tan nityaṁ pāpnoti / atha janma kriyety abhidhiyate tadā 'nityāḥ paramāṇavo janmavattvād iti hetvarthaḥ janmavattvam asiddhaṁ paramāṇūnām iti / atha kriyāvattvaṁ vyañjakam ucyate vyañjakatve 'py anyato 'nityatvaṁ paramāṇūnāṁ vaktavyam / na hy ayaṁ vyañjakasya dharmo yad vyañgyaṁ vastu kuryād api tu anyato bhūtaṁ hetur vyanakti / na hi pradīpo 'santam arthaṁ prakāśayati / prasiddhotkṣepaṇādikriyābhyupagame viruddhaḥ / etena ghaṭādidrṣṭānto vyākhyātaḥ / kriyāvattvaṁ ca kriyāsamavāyaḥ, tadabhyupagame viruddhaḥ anabhyupagame 'nityaḥ paramāṇuḥ paramāṇutvād iti hetvarthaḥ / matupaś cārthāntare drṣṭatvād viruddhaḥ, anarthāntare drṣṭāntābhāvaḥ / evaṁ śeṣāṇi vākyāni vikalpya yathāsambhavaṁ doṣā vaktavyā iti / atha parapakṣasiddhān etān abhyupagati yadi pramāṇato 'bhyupagati kathaṁ parapakṣasiddhāḥ / atha na pramāṇataḥ kathaṁ svayam anupalabdho dharmāḥ parapatipādanāyopādiyata iti // 24-25 //

他方、[全体 (avayavin) は行くこと (gamana) などの運動を有し得ないといって] ある人々は運動を有していること (kriyāvattva) などという点で諸原子は無常であることを証明しようとする。その人々によって運動を有していることが必然的に(1)顕現するもの (vyañjaka) であるのか、あるいは(2)生起したもの (kārika) であるのかということが認められなくてはならない。もし、(1)運動を有しているものが無常なもの (anityatva) を設けるものであるなら、運動をもたないもの (akriya) が常住な (nitya) ものということになる。もし、(2)生起 (janman) が運動であるということが意味される。そのとき、

(宗) 諸原子は無常なるものである。(因) 生起(運動) を有するもの (janmavattva) であるから。

という論議の内容となる。諸原子が生起を有したものの (janmavattva) であるということは成立しない(原子は因をもたず常住であるから) [したがって因は不成である]。もし、運動を有すること (kriyāvattva) が(1)顕現すること (vyañjaka) であるといわれるなら、[運動には] 顕現する性質があるとしても、[諸原子が顕現を有することはないから] 別のことから、

諸原子は無常であるといわれなくてはならない。なぜなら、実在 (vastu) は顕現するものであるとしても、これ (超感覚的な諸原子) は顕現するもの (運動) をダルマとするものではない [したがって因は不成である]。[諸原子とは] 別のもの (全体) から、因は存在 (bhūta) を顕わす。なぜなら、灯火は存在していない対象 (artha) (諸原子) を照らすのではない。上昇 (utkṣepaṇa) などの運動 (kriyā)⁽⁴³⁾ が認められるなら、[全体を認めない汝にとって]⁽⁴⁴⁾ 矛盾が存在する。このこと故に [全体としての] 壺などの喩例が表された。また (3) [全体が] 運動を有すること (kriyāvattva) は運動と和合していること (kriyāsamavāya) である。そのことを [汝が] 認めるなら矛盾が存在する (汝は全体と運動との和合を認めないからである)⁽⁴⁵⁾。[それらの和合を] 認めないなら (運動を有するのは原子であるから)、(宗) 原子は無常である。(因) 原子である (運動を有している) から。という論議の内容となる。

また、(運動を有することという、kriyāvattva) 接尾辞 (matupa) は [原子とは] 別のものに関して、見られる性質があるから、[区別のないもの (諸原子と運動) に関して使用されると] 矛盾がある。別のものでないなら (諸原子が運動を有するなら)、喩例 (無常あるいは常住な原子以外のもの) が存在しない [したがって不共不定因である]。以上のように、諸の他の主張も考察して、可能な限り諸の過ちが指摘されなくてはならない。また、これら他学派の主張において成立しているもの (全体) を認めるなら、もし、プラマーナという点から [全体を] 認めるなら、どうして他学派の主張として成立しているものであろうか (自らにとって成立していることになる)。もし、プラマーナという点から [全体が運動を有することを認め] ないなら、どうして、自ら受け入れられないダルマ (運動) が他者を説得するために適用されようか。

5. [4A] [4B] の解説

以下においては、諸の糸 (諸部分) とは別な布 (全体) が認識されないこと、このことは諸原子に関してもいい得ること、すなわち部分という点から吟味されるなら、原子は実在するものではないことが表されている。ここには全体 (avayavin) から原子 (paramāṇu) に至る批判的吟味の次第があらわされている。これは、上のものと同じ根拠により全体、多数の原子、原子の結合したものの三者を次第して論難し、認識対象ではあり得ないことを論じる Vś k. 11 を取り上げているものである。なお、[4A] [4B] はヴァーチャスパティミシュラによれば、唯識派 (Vijñānavādin) の主張である。また、世親により表された Vś kk. 11-12, 15 の論述はシャーントラクシタの TS 1988-90, 1996, MAK 10-13, カマラシーラの TSP, Māl で、そのまま活用される。⁽⁴⁶⁾

[4A] NBh. pp. 1072, 2-1073, 4 *ad* NS 4-2-26

yad idaṃ bhavān buddhīr āśrītya buddhiviṣayāḥ santīti manyate mithyābuddhaya etāḥ,
yadi hi tattvabuddhayaḥ syur buddhyā vivecane kriyamāṇe yāthātmyaṃ buddhiviṣayāṅgām

upalabhyeta

buddhyā vivecanāt tu bhāvānām yāthātmyānupalabdhis tantvapakarṣaṇe paṭasadbhāvā-
nupalabdhivat tadanupalabdhīḥ // 26 //

yathā 'yaṁ tantur ayaṁ tantur iti pratyekaṁ tantuṣu vivicyamāneṣu nārthāntaram kiñcid
upalambhyate yat paṭabuddher viṣayaḥ syāt, yāthātmyānupalabdher asati viṣaye paṭabud-
dhir bhavanti mithyābuddhir bhavati evaṁ sarvatreti // 26 //

[唯識派の主張]⁽⁴⁷⁾汝 (ニヤーヤ学派) は、諸の知の対象は諸の知に基づいて存在するという
これらは誤った知であると考え。なぜなら、もし、諸の真実の知が存在するなら、知によっ
て吟味が施されているとき、諸の知には対象の本質が認識されよう。

他方、(宗) 諸存在の本質 (yāthātmya) は認識されない。(因) 知によって吟味されるから。
(喩) それ (諸存在の本質) が認識されないことは、糸が除き去られるなら、布の存在は認識
されないように (NS 4-2-26)。

「これは糸である。これも糸である。」というふうにならば個々に諸の糸 (部分) が吟味 (vivicya-
māna) される場合、布 (全体) という知の対象であろう何らかの [糸 (部分) とは] 別のもの
が認識されることはない⁽⁴⁸⁾。[布 (全体) の] 本質が認識されないから、対象が存在しない
場合、存在している布 (全体) の知は虚偽なる (誤った) 知である。同様に (吟味すれば)
[原子を含む] すべての場合において [その存在性は知られない]⁽⁴⁹⁾。

[4B] NV pp. 1072, 12-1073, 11 *ad* NS 4-2-26 (NV p. 1072, 12-13 NBh. p1072, 2-3) (NV p.
1072, 14-15 NS 4-2-26)

ya ete buddhiviṣayā gavādayo ghaṭādayaś ca, naite tattvataḥ santi, kasmāt buddhyā
vivicyamānānām bhedaśo 'grahaṇāt / yathā 'yaṁ tantur ayaṁ tantur ayaṁ tantur iti
buddayā tantuṣu vivicyamāneṣu na paṭaḥ kaścid asti yaḥ paṭabuddheḥ viṣayaḥ syāt, evam
amśuṣu buddayā vivicyamāneṣu, evaṁ tadavayaveṣu tāvad yāvat paramāṇuḥ, paramāṇavo
'pi bhāgaśo vibhajyamānās tāvad yāvat pralaya iti / tad evaṁ sarvasyāsattve gavādibud-
dhayo ghaṭādibuddhayaś ca mithyābuddhaya iti // 26 //

[唯識派の主張]⁽⁵⁰⁾これら牛などや壺などの知の対象、それらは真実として存在しない。何故
であるか。知によって吟味されているものには分析するなら把握されないからである。例えば、
「これは糸である。これも糸である。それも糸である。」と知によって諸の糸 (諸部分) が吟
味される (vivicyamāna) 場合、布 (全体) の知の対象となろういかなる布 (全体) も存在し
ない⁽⁵¹⁾。

同様に、知によって諸の糸 (amśu) が吟味される場合、[いかなる糸も存在しない]。同様に、
それら諸部分が [吟味される場合] から原子にいたるまでが [吟味される]。諸の原子も部分
(bhāga) という点から分析される (vibhajyamāna) その限り存在性を失うこと (pralaya)
になる⁽⁵²⁾。以上のように、すべてのものが非存在であるとき、諸の牛などの知と諸の壺など

の知は誤った知である。

6. [5A] [5B] [5B-1] の解説

以下では、知によって吟味すると諸存在の本質 (yāthātmya) は認識されないという (NS 4-2-26) という対論者の主張に対してニヤーヤ学派の答弁が NS 4-2-27 である。その答弁に関するヴァーツヤーヤナの解説 [5A] は、諸存在を知によって吟味することという論理的根拠 (因) と本質が認識されないという主張命題 (宗) とが矛盾するというものである。これは、諸存在の本質が認識されないなら、そのことを吟味する知も成立しなくなるというものである。ウッディヨータカラは、この答弁 (NS 4-2-27) の注釈 [5B] で、対論者の論理は NS 4-1-37 [5B] [5B-1] に示される一方の無に対して他方の有が成立するという相互の無存在 (itar-*etarābhāva*) に当たる過失があることを指摘している。これは、世親が Vś k. 10 で人無我 (pudgalanairātmya) を悟った後、表象のみ (vijñaptimātra) と悟ることにより、法無我 (dharmanairātmya) を悟ると主張するのに対し、あらゆる点で法が存在しないなら、表象のみ (vijñptimātra) というのも成立し得なくなるとの論難が Vś k. 10 の注釈中に見られるものと同じ内容であるが、それに対して世親は Vś k. 10d で、全てに関して存在しない (無我) というのではなく、遍計された自体として、すなわち所取能取に関して無我 (nairātmya) であると弁明している。これは世親の唯識思想の核心といえよう。この世親の論理がヴァーツヤーヤナによって知による吟味と全ての存在が認識されないこととは相容れないと論難されることを、さらにウッディヨータカラは NS 4-2-27 の注釈中で全てに関してではなく部分的な無であるならば、一方の無に対し他方の有が成立することになるという相互の無存在 (itaretar-*ābhāva*)⁽⁵³⁾ の過失になると論難していると考えられる [5B]。これはウッディヨータカラの「全て (sarva)」に関するアポーハ論批判と考えられる〈注(57)参照〉。なお先の世親の理論は『菩薩地』や『中辺分別論1.1』の世親の注釈中に見られる相対的な空を意味する、すなわち余ったもの (avaśiṣṭam) と同じ理論である⁽⁵⁴⁾。この唯識派による三性説を巡る相対的な空の理論は、中観派の絶対的な空の見地から清弁の『中観心論』や月称の『入中論』で批判される。それらに先立って、ヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラは唯識派の空の論理を批判していることになる。彼等は實在論の立場から、それを行っているので、清弁や月称とは異なる見地からではあるが、中観派の清弁、月称より先立って相互の無存在の過失を指摘している。カマラシーラも無知覚 (anupalabdhi) に関する無の論理を同様に批判している⁽⁵⁵⁾。

[5A] NBh. pp. 1073, 5-1074, 3 *ad* NS 4-2-27

vyāhatatvād ahetuḥ // NS 4-2-27 //

yadī buddhyā vivecanaṁ bhāvānāṁ na sarvabhāvānāṁ yāthātmyānupalabdhiḥ / atha sarvabhāvānāṁ yāthātmyānupalabdhir na buddhayā vivecanam / bhāvānāṁ buddhayā vivecanaṁ yāthātmyānupalabdhīś ceti vyāhanyate / tad uktam avayavāvayaviprasaṅgaś caiva mā pralayād (NV 4-2-15) iti // 27 //

因(知によって吟味されること)は矛盾している(諸存在の本質が認識されないなら、知による吟味も成立し得ない)から(NS 4-2-27)。

もし、知(buddhi)によって諸存在を吟味するなら、全ての存在の本質(yāthātmya)が認識されないことはない。もし、全ての存在の本質が認識されないなら、知によって吟味することは存在しない⁽⁵⁶⁾。諸存在を知によって吟味することと本質が認識されないということとは矛盾する。そのこと(知も存在し得ないという矛盾した見地)が[対論者によって先に]述べられた。

部分と全体との問題点は、無に帰する(pralaya)まで存続することになる(NV 4-2-15)。

[5B] NV pp. 1073, 12-1074, 12 ad NS 4-2-27

vyāhatatvād ahetuḥ (NS 4-2-27) / buddhyā vivecanāt tu bhāvānām sarvabhāvānupapattir ity ayuktam / kasmāt vyāghātāt / ko vyāghātaḥ sahā sambhavaḥ / yadi buddhayā vivecanaṁ na sarvabhāvānupapattiḥ / atha sarvabhāvānupapattir na buddhayā vivecanaṁ sarvabhāvānām iti / sarvabhāvānupapattir iti bruvāṇaḥ pramāṇaṁ paryanuyojaḥ / yadi pramāṇaṁ bravīti vyāhataṁ bhavati / atha na bravīti artho 'sya na siddhayati pramāṇābhāvāt / athāpramāṇikī siddhiḥ sarvabhāvopapattiḥ kasmān na siddhayati yaś ca sarvabhāvānām abhāvo bhāveṣv itaretarāpekṣa (itaretarābhāva) siddher (NS 4-1-37) ity etasmin vāde doṣa uktaḥ, sa ihāpi drṣṭavya iti // 27 //

因(知によって吟味されること)は妥当しない(NS 4-2-27)。

矛盾している(諸存在の本質が認識されないなら、知による吟味も成立し得ない)から。一方、知によって吟味することから諸存在にとって、すべての存在があり得ないということは不合理である。

[反論] なぜであるか。

[答論] 矛盾するもの(vyāghāta)だからである。

[反論] 何が矛盾するものであるか。

[答論] 不合理(asambhavaḥ)を具えたものである。もし、知によって吟味を施すなら、すべての存在は妥当しないもの(anupapatti)ではない。もし、すべての存在が妥当しないものなら、知によってすべての存在を吟味することも存在しないからである。⁽⁵⁷⁾すべての存在が妥当しないという主張は証明すること(pramāṇa)を必要とする。もし、証明が提示されれば、矛盾が存在する。もし、[証明が]提示されなければ、その意味するところ(artha)は達成されない。証明が存在しないからである。もし、証明することなしに成立するなら、すべての存在の妥当することが、何故、成立しないのであるか。また、すべての存在は非存在がある。諸存在に関しては相互の非存在(itaretarābhāva)⁽⁵⁸⁾が成立するから(NS 4-1-37)というこの

[反論者の]主張⁽⁵⁹⁾に関して過失が述べられた。それがこの(NS 4-2-27)場合にも知られなくてはならない。

[5B-1] NBh. pp. 977, 2-979, 10 *ad* NS 4-1-37

ayam अपरा ekāntaḥ

sarvam abhāvo bhāveṣv itaretarābhāvasiddheḥ // NS 4-1-37 //

yāvad bhāvajātaṁ tatsarvam abhāvaḥ / kasmāt bhāveṣv itaretarābhāvasiddheḥ / asan
gaur aśvātmanā anaśvo gauḥ asann aśvo gavātmanā agaur aśvaḥ ity asatpratyayasya
pratiṣedhasya ca bhāvaśabdena sāmānādhikaraṇyāt sarvam abhāva itī pratijñāvākya (1)
padayoḥ (2) pratijñāhetvoś ca vyāghātād ayuktam / (1) anekasyāśeṣatā sarvaśabdasyārtho,
bhāvapratīṣedhaś cābhāvaśabdasyārthaḥ / pūrvaṁ sopākhyam uttaraṁ nirupākhyam
tatra samupākhyāyamānaṁ kathaṁ nirupākhyam abhāvaḥ syād iti na jātv abhāvo nirupā-
khyo 'nekatayā 'śeṣatayā śakyaḥ pratijñātum iti / sarvam etad abhāva itī cet yad idaṁ
sarvam itī manyase tad abhāva itī evaṁ cet anivṛtto vyāghātaḥ, anekam aśeṣaṁ cetī yad
idaṁ sarvam itī manyase tad abhāva itī evaṁ cet anivṛtto vyāghātaḥ, anekam aśeṣaṁ cetī
nābhāve pratyayena śakyaṁ bhavitum / asti cāyaṁ pratyayaḥ sarvam itī, tasmān nābhāva
itī /

(2) pratijñāhetvoś ca vyāghātaḥ sarvam abhāva (NS 4-1-37) itī bhāvapratīṣedhaḥ pratijñā,
bhāveṣv itaretarābhāvasiddheḥ (NS 4-1-37) itī hetuḥ / bhāveṣv itaretarābhāvam anu-
ñāyāśrītya ca itaretarābhāvasiddhyā sarvam abhāva ity ucyate / yadi sarvam abhāvo
bhāveṣv itaretarābhāvasiddheḥ itī nopapadyate / atha bhāveṣv itaretarābhāvasiddhiḥ, sar-
vam abhāva itī nopapadyate /

以下のものが、他の極論である。

[反論者による主張]

すべてのものは非存在である。諸存在に関して相互の非存在 (itaretarābhāva) が成立するからである (NS 4-1-37)。(60)

生起した存在である限り、そのすべてのものは非存在である。

[ニヤヤ学派による主張] 何故であるか。

[反論者による主張] 諸存在に関して相互の非存在が成立するからである (NS 4-1-37)。牛は馬の本質としては非存在である。馬は牛の本質としては非存在である。馬は非牛であるから、非存在という知識と [存在の] 否定とには、存在という言葉によって同一基体性 (sāmānādhikaraṇya) にあるから、すべてのものは非存在である。

[ニヤヤ学派による主張] 以上の [反論者の] 主張 (pratijñā) の表現に関して、(1) 二つの言葉 (すべてのものと非存在) 及び(2) 主張 (すべてのものは非存在である) と因 (相互の非存在が成立するから) とに [相互の非存在はすべてのものの非存在ではない故] 矛盾があるから不合理である。(1) 多というすべてのものという言葉の意味は、余すところがないこと (aśeṣatā) ということである。また非存在 (abhāva) という言葉の意味は存在の否定である。

前者(すべてのもの)は識別し得ること(rupākhyā)を具えており、後者(非存在)は「無であるから」識別し得ることを離れている。そのうち、識別し得るものが、どうして識別できないで、非存在であろうかということは、識別し得ない非存在は、決して多なる余すものなきものということによって主張することはできないということである。このすべてのものは非存在であるというこの全てのものという汝が考えるものは非存在であるということであれば、「表象のみを非存在でないと認めているから」矛盾は免れえない。多であることと余すことなきことということは非存在に関して知(pratyaya)によっては起こり得ない。しかしながら、この知がすべてのものとして存在する(表象のみとして存在する)から、したがって「すべてのものは」非存在ではないということである。

(2)また、主張と因の両者には矛盾がある。すべてのものは非存在である(NS 4-1-37)という「反論者の」主張は、存在を否定することである。諸存在に関して相互に非存在であることが成立するから(NS 4-1-37)というのが「反論者の主張の」因である。諸存在に関して、相互に非存在であることを認め、また依存して、相互に非存在であると証明することによって、すべてのものは非存在であるといわれる。もし、すべてのものが非存在であるなら、諸存在に関して相互に非存在であるからという「反論者の主張の因は」不合理である。もし、諸存在に関して、相互に非存在であることが「成立するなら」すべてのものは非存在であるということとは不合理である(一方の非存在に対して、他方が存在することになるから)。

結 論

以下において世親の原子無部分説とニヤーヤ学派のヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラの原子無部分説との論議が確認される。それは、

1. NS 4-2-23の注釈においてヴァーツヤーヤナは、世親のAKBhに表される原子の有部分説を取り上げている。それは、形(samsthāna)は部分(色彩の原子)の集結したものであるから、集結し得るからには部分(色彩の原子)自体も部分を有することを意味する。この見解が取り上げられる。

2. NS 4-2-24に関しヴァーツヤーヤナは、ウッディヨータカラに先立ち原子の有部分であることを根拠に原子には他の原子との結合があることになり原子の単一性は不成立となるという世親のVś k. 12またVś k. 14abを取り上げている。それに対し、ヴァーツヤーヤナは、微細な原子よりさらに微細なものは存在せず、NV 4-2-25の通り、分割は無限遡及とならざるを得ず不合理である。したがって、原子の無部分性は否定し得ないとする。ウッディヨータカラは、NV 4-2-25の注釈で、1. に関し、無部分な物体(mūrttimat)も存在するから、有部分という因は不確定であるとし、原子有部分説は単一な原子から有部分な原子が生起することになり、それには喩例もあり得ず、結果が起こる以前の無(prāgbhāva)も成立しない難じる。また物

体と原子とが無区別である限り、所有の接尾辞(-mat) はあり得ない。2. に関しては、Vś k. 12を引用し、原子には区別される位置 (deśa) は存在しないから世親による Vś k. 12の論難は当たらない。続いて方位を根拠とし原子の単一性を否定する Vś k. 14ab を引用する。これは、ヴァーツヤヤナに従ったものであり、以下の論駁を施す。原子には方位という位置の区別 (digdeśabheda) は存在しないから、その論難は充當されない。k. 14c の影と抵抗とは原子の有部分によりおこるのではなく、物体、触れ得る性質による。影は光の原子が妨げられるから起り、有部分という因は成立しない。

続いて、〈原子は運動を有するから無常である〉と主張する論者の見解を取り上げ、全体と運動との和合 (kriyāsamavāya) を認めない者にとって原子と運動とを有することに区別はなく主張命題は同語反復となり、喩例も成立しない。これは Vś k. 15の単一な全体 (avayavin) には、一歩で全てを行くことになり運動としての行くこと (gamana) と行かないこととの対立があり得ないという世親の全体批判に対して弁明するものである。

3. NS 4-2-26の注釈でヴァーツヤヤナは、ヴァーチャスパティが唯識派の主張とする如く〈布（全体）から原子に至り、知 (buddhi) の対象であるものは認識されない〉を取り上げる。これは、Vś k. 11を指示している。

4. NS 4-2-27を注釈する際、〈全ての存在の本質 (yāthātmya) が認識されないなら、知による吟味も存在しない〉と難じる。これは、人無我、法無我ではあるが、それは所取能取に関してであるから、表象のみ (vijñaptimāra) は成立し得るという Vś k. 10を論難するものである。ウッディヨータカラは、その注釈で相互の無存在 (itaretarābhāva) の過失であると難じる。以上の通り、ヴァーツヤヤナとウッディヨータカラとは、世親の AKBh Vś における原子有部分説を論難し、NS の注釈を通じ原子無部分説を確定しようとする。

【略号】

AKBh Vasubandhu, *Abhidarmakosabhāṣya*, ed by P. Pradhan, 1967

Māl Kamalaśīla, *Mādhyamakāloka*, P.No.5287, D.No.3887

MAK, MAV Śāntarakṣita, *Madyamakālaṅkāra-kārikā, -vṛtti*, ed. by M. Ichigo, 1983

NBh, NV, NVT Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's *Bhāṣya*, Uddyotakara's *Vārttika*, Vācaspati Miśra's *Tātparyāṭīkā and Viṣvanātha's Vṛtti*, ed by Nyaya-Tarkatīrtha, Taranatha. and Tarkatīrtha, Amarendramohan, Calcutta Sanskrit Series, Calcutta, 1936-44, reprinted. Kyoto, 1982.

PVin I: Dharmakīrti, *Pramāṇaviniścaya*. I Kapitel, Pratyakṣam by Tilman Vetter, Wien, 1966.

TS Śāntarakṣita, *Tattvasaṅgraha*, Kamalaśīla, TS-*pañjikā* ed. by S.D.Shastri, G.O.S.

VN Dharmakīrti, *Vādanyāyaḥ*, ed. by M.T.Much. Teil Sanskrit-Text. Wien 1991 P.No.5715, D. No.4218

VNV Śāntarakṣita, *Vādanyāvṛttivipañcitārtha*, ed by S.D.Shastri. Varanasi. 1972. P.No.5275 D.No.4239

Vś Vasubandhu, *Vimśatikā vijñaptimāratāsiddhiḥ*, ed. Sylvain Lévi, 1925

【参照論文】

- 梶山雄一(1976) 唯識二十論、大乘仏典15世親論集所収
 Gaṅgānātha Jha (1983) *The Nyāyasūtra of Gautama with Vātsyāyana's Bhāṣya and Uddyotakara's Vārttika*, Indian Thought Series, 4 vols, 1915, reprinted Kyoto 1983.
 小林 守(1986) カマラシーラの離一多論証—『中観明』試訳(上)—、東北印度宗教学会論集第13号
 櫻部 建(1975) 『俱舎論の研究』界、根品、法蔵館
 Sylvain Lévi (1932) *Matériaux pour l'étude du système Vijñaptimātra*, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion.
 長尾雅人(1978) 空性に於ける「余れるもの」、『中観と唯識』所収、岩波書店
 中村 元(1996) 『ニヤーヤとヴァイシェーシカ思想』中村 元選集 [決定版] 第25巻、春秋社
 船橋一哉(1987) 『俱舎論の原典解明』業品、法蔵館
 本田 恵(1999) 『ニヤーヤ経註』、平樂寺書店
 山口 益、野沢静証(1977) 『世親唯識の原典解明』、法蔵館
 山上証道(1999) 『ニヤーヤ学派の仏教批判』平樂寺書店
 森山清徹(1990) 後期中観派とダルマキールティ(2) —「空」を巡る論争 Lakṣaṇaśūnyatā et Svabhāvānupalabdhi—、佛教学部研究紀要通巻74号
 (2014a) ダルマキールティ、シャーンタラクシタとウッディヨータカラ—avayavinを巡って、*Vādanyāya* とその注釈 (VNV) との和訳研究—、佛教学部『仏教学部論集』第98号
 (2014b) 世親、ヤシヨミトラとヴァーツヤヤーナ、ウッディヨータカラ—部分の集合論と全体(avayavin) 論—、藤本浄彦先生古稀記念論文集『法然仏教の諸相』、法蔵館
 (2015a) 世親の『俱舎論』『唯識二十論』とニヤーヤ学派(ヴァーツヤヤーナ、ウッディヨータカラ)—全体と、原子の結合論—、小澤憲珠先生頌寿記念論文集
 (2015b) 世親の『俱舎論』『唯識二十論』とヴァーツヤヤーナ、ウッディヨータカラ、印佛研 No.63-2

〔注〕

- (1) cf 森山(2015a) (2015b) (2) cf AKBh 森山(2014b) (3) cf AKBh p.195,7 [1A-2], AKBh p. 195,11-12 [1A-3] 下線部、櫻部(1975) pp. 101-102 mūrṭi (4) cf 観所縁論、山口(1977) p. 453 p. 456 pārimaṇḍalya, 勝論経7-1-20 parimaṇḍala 中村(1996) p. 734 (5) cf NVT p. 1064, 17 śūnyatāvādin (6) cf NS p. 1067, 16 ad NS 4-2-25 [3b,4] 下線部 (7) cf 球形NBh. p. 1064,4 parimaṇḍala [1A] 下線部 (8) cf NV p. 1068, 5-11 ad NS 4-2-25 [3B,5] (9) NV p. 1068, 18 [3 B,7] Vś k.12ab (10) Vś k.12cd, cf AKBh. p. 32, 11-13 kiṃ punaḥ paramaṇavaḥ sprśanty anyonyam āhosvin na / na sprśantī kāśmīrakāḥ / kiṃ karaṇam / yadi tāvat sarvāmanā sprśeyur miśribhāveyur dravyāṇi / athaikadeśena sāvayavāḥ prasajyeran / niravayavāś ca paramaṇavaḥ / また、諸原子は相互に接触するか、あるいは、[接触し] ないのであるか。カシュミールの人たちは、接触しないと主張する。[反論] 何故であるか。[答論] もし、まず全体的に (sarvātmanā) [諸原子が] 接触するなら、諸のドラヴィヤは一緒になってしまう。もし一つの位置で (ekadeśena) [接触するなら、諸原子は] 部分を有するものになってしまう。しかし、諸原子は部分をもたないものである。cf 桜部(1975) p. 225 この全体としてか、一つの位置としてか、という選択肢によりその結合関係の仕方を問うことは、世親はニヤーヤ学派の主張する全体 (avayavin) と部分 (avayava) との和合関係 (samavāya) を論難する場合にも行う方法である。cf 森山(2014b)、この全体としてか、一部分としてか、という選択肢による吟味法はダルマキールティも活用する。PV 3-434 戸崎(1985) p. 115、またシャータラクシタは VNV p. 30, 3-13で、この吟味法により全体 (avayavin) 批判を行なっている。cf 森山(2014a) pp. 16-17 MAV ad MAK11-13 TSP ad TS 1988-1990ではこの方法による全体 (avayavin) 批判が離一多性因による論証に組み込まれている。これらの吟味法の着想の原点は、上のAKBhのみならず Vś 12にある。(11) cf NBh p. 1065, 5-6, NV p. 1068, 16-17 ad NS4-2-25 [3B,6] 下線部 (12) cf ll. 9-11, NV p. 1068, 16-17 ad NS4-2-25 [3B,6] 下線部 (13) cf NBh p. 1065, 5-6 [2A,2] 下線部, NV p. 1068, 16-17 ad NS

4-2-25 [3B,6] 下線部 (14) cf II. 9-11, NV p.1068,16-17 *ad* NS4-2-25 [3B,6] 下線部 (15) NV [3B,10] Vś k.14ab (16) NV [3B,10] Vś k.14ab (17) cf NV p.1068,11-12 [3B,6] (18) この [3B,1]—[3B,5] は NS 4-2-23 に関してである。(19) cf NS 4-2-23, NV p.1071, 11-12 *ad* NS 4-2-25 [3B,11] 下線部 (20) NS 4-2-17 *paraṃ vā trūṭeḥ* // [原子は] 微細なものよりさらに微細である (部分をもたない)。(21) cf NS 4-2-23 (22) cf NV p.1064, *ad* NS 4-2-23 [1B] (23) cf NS 4-2-23 仏教徒 [1B] (24) cf AKBh p.195,5 [1A,2] (25) A DICTIONARY OF SANSKRIT GRAMMAR by Kashinath Vasudev Abhyankar Oriental Institute Baroda 1961, p.277 (26) cf AKBh p.195,13-14 [1A-3] 下線部 (27) cf NV *ad* NS 2-1-36 (28) 全体 (*avayavin*) 批判、森山 (2014) (29) 以上は NS 4-2-23 の註釈として、世親の AKBh の内容を批判的に取り扱うものである。(30) この [3B,6]—[3B,11] は NS 4-2-24 の註釈として、世親の Vś KK. 12,14,11 を批判的に取り扱うものである。(31) cf NBh p.1065,5-6 *ad* NS 4-2-24 [2A,2], p.1064,9-11 *ad* NS 4-2-23 [2A,2] (32) cf NBh p.1064,5 [2A,1], NV p.1065,13-14 [2B,1,2] (33) cf NS 4-2-23 [1A] [1B] (34) NBh p.1065,5-6 *ad* NS 4-2-24, p.1064,9-11 *ad* NS 4-2-23 [2A,2] (35) NBh p.1064,6 *ad* NS 4-2-24 [2A,1] (36) Vś k.12 が NS に引用されることは、S. Lévi (1932) p.52 fn.2 に指摘される。(37) cf NV p.1065,18 *ad* NS 4-2-25 [3B,1] (38) cf Vś k.14c *chāyāvṛti kathāṃ vā* どうして影と抵抗とは起こるのであるか。(39) cf Vś k.14c *chāyāvṛti kathāṃ vā* (40) cf NV p.1065,18 *ad* NS 4-2-25 [3B,1] (41) ヴァイシェーシカは五種の運動を認める。cf 中村(1996) p.553 (42) cf PVin I pp.84,18-86,9、山上(1999) p.266,3) 訳注参照、TS 592-593 *sthūlasyaikaśvabhāvatve makṣīkāpadamātrataḥ / pīdhāne pīhitaṃ sarvaṃ āśajetāvibhāgataḥ // 592 // rakte ca bhāga ekasmin sarvaṃ rajyeta raktavat / viruddhadharmabhāve vā nānātvam anuśajyate // 593 //* 粗大なものが単一の自性のものであるなら、蜂の足だけで覆われるなら、全てが覆われることになる。部分がないがないからである (592)。また、一部分が赤く染められれば、全てが赤くならう。あるいは、対立した性質が存在している場合、多様ということになる (593)。cf MAV *ad* MAK 10cd, p.46 (43) cf VS1-1-7, 運動 (*karman*) とは、上がること (*utkṣepaṇa*)、下降すること (*avakṣepaṇa*)、縮むこと (*ākuñcana*)、伸びること (*prasāraṇa*)、行くこと (*gamana*) 中村(1996) p.634, TS 691 (44) cf NBh p.497,1-8, NV p.497,10-17 *ad* NS 2-1-34 <全体が存在しないからには、すべてのもの(六句義)は把握されない> 森山(2015) [2-1] [4-1] (45) Vś p.8,11-14 *ad* k.15 *ekatve na kramēṇetir yugapan na agrahānagrahau / vicchinnānekavṛttīś ca sūkṣmānikṣā ca no bhavet // 15 // yadi yāvat avicchinnāṃ nānekaṃ cakṣuṣo viśayas tad ekam dravyaṃ kalpyate pṛthivyāṃ kramēṇetir na syād gamanam ity arthaḥ / sakṛtpādakṣepena sarvasya gatavāt /* <単一性に関しては、次第に進むことはなく、同時に把握と把握しないことの二は存在しない。別々な多なるものの存在することと、微細なものが見られないことはあり得ない (k.15)。もし、眼の対象が断じられていず、多でない限り、それは単一のドラヴィヤであると考えられるなら、大地において次第して進むこと (*iti*) すなわち行くこと (*gamana*) はないであろうという意味である。一度、足を下ろせば、全てに行くことになるからである。> Vś k.15 での単一性が、全体 (*avayavin*) を指すことはヴィニッタデーヴァ注からも知られる。したがって、対立関係が成立しないことを根拠とする全体批判は世親によって表されていることになる。これが、ダルマキールティの PVin [cf 船山(1990) p.617] に、さらにはダルマキールティからシャーンタラクシタの MAV *ad* MAK10 に継承されたといえよう。(46) Māl (p239a⁶-b⁴, D216a⁵-b²)、小林 (1986) p.85 [1・1・1・5] [1・1・1・6] に訳出 (47) NVT p.1072,21 *Vijñānavādy āha* (48) cf Vś p.6,29-30 *ad* k.11 *na tāvat ekam viśayo bhavaty avayavebhyo 'nyasyāvayavirūpasya kvacid apy agrahaṇāt* まず、単一なものは対象ではない。諸部分とは別な全体を本質とするものは、どこにも認識されないからである。(49) cf Vś pp.6,30-7,2 *nāpy anekaṃ paramāṇūnāṃ pratyekam agrahaṇāt / nāpi te saṃhātā viśayibhavanti / yasmāt paramāṇur ekam dravyaṃ na sidhyate //* 諸原子が多であっても [認識され] ない。個々に認識されないからである。それらが結合されても、対象ではない。なぜなら、原子は単一のドラヴィヤとして証明されないからである。(50) NVT p.1072,21 *Vijñānavādy āha*

(51) cf Vś p. 6,29-30 *ad* k. 11 註(49)参照 (52) cf Vś pp. 6,30-7,2 *ad* k. 11 註(49)参照 (53) cf 四種種ある無の一つ、中村(1996) p. 512 (54) 長尾(1978) pp. 542-560 (55) 森山(1990) (56) cf Vś pp. 6,13-14 *ad* k. 10d *yadi tarhi sarvathā dharmo nāsti tad api vijñaptimātram nāstīti katham tarhi vyavasthāpyate* / そこで、もし全ての点で存在がないのなら、その表象のみということも存在しないから、一体どうして [表象のみということが] 確立されようか。 (57) ウッディヨータカラによる「全て (sarva)」に関するアポーハ論批判 (NV *ad* NS2-2-66, p. 687, 6-12) は TS では次の通り表わされる。 *sarvaśabdasya kaścārtho vyavacchedyaḥ prakalpyate / nāsarvanāma kiñcid dhi bhaved yasya nirākriyā // 981 //* <また、全てということばに排除される何らかの対象が考えられようか。なぜなら、全てでない (asarva) という何らのものも存在しえない。いかなるものが排除されようか。> *ekādyaśarvam iti cet svārthāpohaḥ prasajyate / aṅgānām pratiṣiddhatvād aniṣṭeś cāṅginaḥ pṛthak // 982 //* <[反論] — など (全てに非ざる部分) は全てのものではない。[答論] 自らの意味するところを否定すること (svārthāpoha) となってしまう。諸部分が否定されるから、また [汝、仏教徒にとり諸部分と別に] 全ては認められないから。> それに対しシャーントラクシタは TS 1185-1187 で弁明する。 *sarve dharmā nirātmānaḥ sarve vā puruṣā gataḥ / sāmastyam gamyate tatra kaścid aśas tv apohyate // 1185 //* <すべての存在は無我である、あるいはすべてのの人々が行く、そこにおいて、総体が理解され、一方、何らかの部分が排除される。> さらに *kecid eva nirātmāno bāhyā iṣṭā ghaṭādayaḥ / gamaṇam kasyacid caivam bhrāntis tad vinivarttate // 1186 //* <外界として認められた壺などのあるものだけが無我である。また何人かの人が行くというそういった迷乱がある。それを排除する。> すなわち部分的な無我という迷乱が否定されると述べ、TS 1187 では、全ての部分の否定が意図されているのではなく、自らの意味するところを否定することになるというのは無知 (ajñatā) によって述べられたとウッディヨータカラによる「全て」に関するアポーハ論批判すなわち一切 (全て) とは非一切 (部分) の排除である。したがって仏教徒にとり全ては部分からなるから部分を排除すれば全体も成立しないということを退けている。(58) cf 四種種ある無の一つ、註(52)参照 (59) cf Vś p. 6,14-18 *ad* k. 10d *na khalu sarvathā dharmo nāstīty evam dharmanairātmyapyaveśo bhavati / api tu / kalpitātmanā // 10d //* *yo bālair dharmāṇām svabhāvo grāhyagrāhakādiḥ parikapitas tena kalpitenātmanā teṣām nairātmyam na tv anabhilāpyenāmanā yo buddhānām viṣaya iti* / あらゆる点で存在は存在しないというそういう仕方、法無我の理解があるのではない。かえって、遍計された本質として [無我であると理解するのである] (10d)。所取能取などを有する凡夫達によって遍計された諸存在の自性がある。その構築された本質としては、それらは無我なのであるが、言葉の構築を離れた本質として諸仏の対象は [無我なのでは] ない。(60) この NS 4-1-37 に関しては、ヴァーチャスパティミシュラ (NVT p. 977, 17) によれば Śūnyatāvādin による主張とされる。この空性論者とは、6. の解説で述べた通り、所取能取に関する無我を主張し、表象のみは無我ではないとする世親を初めとする唯識論者を指し中村 (1996) p. 347(12)、本田 (1999) p. 268(36) に示される中観派ではないと考えられる。

(もりやま せいとつ 仏教学科)

2014年11月17日受理